



2014年5月

期待高まるフロンティア・・・ミャンマー人材像レポート

新規開拓のため訪れているミャンマー。政治的にも大きな変化もあり、注目されているミャンマーの現状や現地の情報をシリーズでレポートします。

第一回目の今回は、現ミャンマーで日本語を学ぶ学生をはじめとする現地の人材について。視察で訪れたのはヤンゴン市内にある日本語学校。日本語を勉強し始めて2～3ヶ月という学生の授業風景を見学しました。



【日本語の授業の様子】

ミャンマーの公用語はミャンマー語（ビルマ語）で、日本語とイントネーションが似ているということもあり、日本語を学んで2～3ヶ月の生徒とはいえ意思疎通が可能です。会話の上達は他国に比べても早く、日本語を学んでいる学生も多いです。

ヤンゴン市内には、100校以上の日本語学校があります。

この日出会った生徒の中には2時間半かけて学校に通っているという学生もあり、まだまだインフラの整っていないミャンマーでの現状が垣間見ることができました。そうやって熱心に通ってくる学生は、日本語を話したくて仕方がないという様子で積極的に話しかけてきてくれ、その熱心な姿が印象的でした。

特に印象的だったのは、きらきらとした目！ミャンマーの若者は、明るくて素直で目が輝いています。町の中でも、笑顔で“Hello”と声をかけられることが多かったミャンマー。親しみやすく、おおらかな国民性を感じる事が出来ました。（続く）



【ミャンマーの人材像】

- 仏教国で信仰心が篤く、穏やかな印象
- 明るくて、素直な印象
- 日本語の習得が早い
- 大学は基本的に授業が英語であるので、大学生は英語を話すことができる。

*人材の判断基準は担当者によるものです。

ミャンマーの人件費に関しては、近隣 ASEAN 諸国に比べて低く魅力がありますが、民営化が始まったばかりで技量教育のこれからに期待するところです。

軍事政権下、優秀な人材が海外へ流出してしまっている現状があるため、よい人材は絶対的に不足しています。

そのため、将来を見据えて「育てる」という視点が必要となってきます。